
恋は突然去ってゆく

マランビジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋は突然去ってゆく

【Nコード】

N8920S

【作者名】

マランビジー

【あらすじ】

「恋は突然やって来る」のサイドBです。

インドに渡航した佐倉響子の帰国から物語が始まります。

振り回されながらも想いが募る主人公の告白までを描いています。

1 帰って来た女

東京の桜がアスファルトの路面を染め始めた四月上旬、あの女が帰って来た。我が社を退社してインドに行った佐倉響子帰国の噂が本当だったことを、上司が教えてくれたのは月曜日のことだった。その日の社内は佐倉色に染まった。僕はすでに佐倉色に染まっていたので改めて歓喜することはなかった。むしろその逆だった。同期で中途入社した僕には何の相談もなく、会社を辞めておいて帰って来ても連絡さえなかった。しかも横浜の店に勤めているとはどういう見だろうか。僕は非常に不愉快だった。その週の水曜日に会社に来ることも、僕ではなく上司と約束をしていた。僕は完全に無視されていた。とは言えこちらから連絡をする手立てもなく文句を言うことさえできなかつた。僕は水曜日に佐倉がやって来たら必ず文句を言ってやるうと決意した。

水曜日の昼休みに彼女はやって来た。僕は上司のチーフに声をかけた。

「佐倉がショールームに来ているみたいですよ」

「食事中だから遠慮するよ」とチーフは答えた。人気者の登場にあまり関心がなさそうなチーフだった。僕は急いでエレベーターホールに向かった。ところがエレベーターホールは社員で溢れかえっていたので非常階段で下りることにした。こちらも人が多かつたがエレベーターよりはましだった。ショールームに到着するとすでに大勢の社員が集まっていた。同じ時期に入社した佐倉の人気は大したものだった。佐倉は四方八方から声をかけられていた。文句を言ってやるつもりだったが声をかけるのも難しかった。佐倉は受付の口に何か言つとショールームの中心に立つて両手で歓声を制止した。「皆の衆、お元気そうでなにより！」佐倉は相変わらずブツ飛んでいた。

「おっ！お出ましですね。チーフと呼ばれたんですからいてくれな

「きや困りますよ」と言つてチーフに手を振つた。手を振られたチーフは困ると言われて困つた顔をした。

「おい、みんなチーフが通れないよ」佐倉が言つとチーフと佐倉の間にいた社員たちの群れが割れて道が出来た。チーフは群衆の間を抜けて佐倉の側まで行つた。僕は群れの後方からそれを眺めていた。佐倉に気づかれもしない自分が情けなくなつた。

2 再会

佐倉を取り巻く女子社員の歓声は佐倉の声をかき消して僕には届かなかった。僕には見えないところで話しは盛り上がり佐倉が「今晚は盛り上がろうね」と言った声だけが聞こえた。わざわざショールームまで下りてきたのに何も収穫がなかった。

エレベーターで五階の営業部に戻ると部内でも佐倉の話題で盛り上がっていた。

「みんなちよつといいかな」とチーフが言ったので話しが中断された。

「今晚なんだけど、佐倉の飲み会に出席してもらえないかな？」チーフが仕事以外のことを僕たちに頼んだのはこれが初めてだった。もちろん僕はOKした。他の営業部員も大半がチーフの申し出を快く受けた。その日の業務はいつものようにてんこ盛りだったけど、皆が定時までには終わらせたいたい思いがあったので全員が普段見られない協力体制を築いた。お陰で定時の十分前には終了した。

その日の飲み会は驚くほど盛況だった。店頭では主役のはずの佐倉が受付をしていたので来場者は全員喜んでいた。僕は入場の列に紛れて日陰の存在だった。しかし、佐倉は僕を見逃さなかった。

「おっ！ もしや蒲田ではないか。久しぶりだねえ。元気だった？」佐倉は僕を見つけると大声で再会の言葉を述べた。

「ああ、久しぶり」と僕が言うと佐倉は僕の手首を掴み「受付手伝いたいでしょう？」と聞いた。

「何を手伝うんだよ」と僕が聞くと佐倉はダンボール箱に入っていたビンゴのカードを指差した。

「それをそっちのプログラムと一緒にして私に渡してほしいんだよね。二枚一組だよ。OK？」佐倉は予想以上の来客だったので二枚一組セットの準備が間に合わなかったのだ。

「OK、渡せばいいんだな」と言うと佐倉は右手の親指と人差し指

で円を作ってOKのサインをした。

「蒲田、手際が良いねえ。助かる、助かる」と言いながら佐倉は来客に愛嬌を振りまいていた。

「盛況だな」と僕は言った。

「こんなに来るとは思わなかったよ。ビンゴの景品少なかったかな？まあいいか」佐倉の言葉は独り言のようだった。

「お前インドで何をしていたの？」僕は佐倉に聞いた。

「毎日、絵を描いていたよ。たくさん描いたなあ。見たい？」佐倉はインド生活を回想しながら話しをした。

「見せてくれるのか？見たい。見たい」と言うと佐倉は「いいよ」と言った。

「蒲田さあ、あさつて見においでよ。ちょうど飲み会があるんだよね。男性社員二名、調達してきてね。場所は渋谷でいいからさ」佐倉は勝手に予定を決めていた。

「あさつて？」僕は突然の申し出に困惑しておかしな声をあげた。

「そつだよ。お願いね」と佐倉が言った。佐倉は全ての来客を出迎えると会場に足を向けた。

「蒲田も早く行こうよ」と言って佐倉は颯爽と歩いて行った。

3 宴の主役

仕事帰りの飲み会とは思えないほどの人で溢れた会場は個性に乏しいスーツ姿ばかりだった。僕も例外ではなかった。そんな中にあつて佐倉だけが突飛な格好をしていた。インド綿の白地に青いポルカドットのラウンドネックブラウスとデニムのスカート。一人だけカジュアルな装いだった。佐倉にしては珍しい寒色を身に着けていた。首回りがくたびれたようによれよれのブラウスは佐倉好みの古着に違いなかった。

「蒲田、蒲田、君はビールでいいのかい？」佐倉は缶のハイネケンを手にしていた。

「気が利くねえ、ありがとう」僕が言うと佐倉は店のカウンターを指差した。

「あそこにたくさんあるぞ。好きなビールを選びなよ」佐倉は満面の笑みで言った。僕はひきつったが素直にカウンターに向かった。振り返って佐倉を見ると大勢のファンたちに囲まれていた。僕は佐倉と同じハイネケンを選んでカウンターに座った。佐倉はその晩の主役だった。話し相手さえいなかった僕とは大違いだった。

「おい、蒲田あ！」佐倉が僕を呼んだ。佐倉は僕に向かって手を振って「こっちにおいでよ」と叫んだ。佐倉に名指しされたことで僕は大きい目立った。僕が佐倉の元に進むまで多くの視線が僕に集中した。僕は恥ずかしさでどんな顔をしていたかさえわからなかった。

「蒲田あ。なんて顔をしているんだい」佐倉が僕に言った。

「どんな顔だよ」

「蛇に睨まれたカエルみたいだぞ」佐倉が言うと佐倉の取り巻きたちが一斉に笑い始めた。

「カエル？」僕は佐倉に怒って見せた。

「そうそう、その顔のほうがいいぞ。ホラー映画じゃないんだから」

佐倉は左手に持っていたハイネケンを僕に差し出した。

「酔いが足りないぞ」佐倉は自分のハイネケンを掲げて乾杯のポーズをとった。僕はまだ開けていないハイネケンで乾杯に応じた。佐倉の取り巻きたちも佐倉のハイネケンにグラスを合わせた。いつの間にか僕は佐倉の取り巻きたちの質問攻めにあっていた。佐倉が僕を目立たせたことで僕はその場の主役に昇格した。僕が大勢の人に応じていると佐倉は楽しそうにその様子を見ていた。

「ここはよろしくね」と言うと佐倉は別の集団の中に紛れていった。

描くと思ったら美しい風景画も描く。佐倉の多才に皆ため息をついた。

「佐倉さんすごいね」と佐倉の友人が言うと「これしか取り柄がないからねえ。今度壁画を描くからみんなおいでよ。蒲田は車で脚立を運んでね」と言っただけでも勝手に予定を決めていた。断りようもない申し出に僕は複雑な思いで応じたのだ。

5 街中のアーティスト

佐倉の壁画イベントはなんと横浜の国道沿いで行なわれた。僕は車に脚立を載せて佐倉が指定した場所に到着した時に仰天した。なんと約束した時間前に佐倉が約束の場所にいたのだ。

「佐倉！どうしたんだ？」僕は思わず声をあげてしまった。

「何が？」佐倉は僕が言ったことの意味が分かっていなかった。

「だってお前まだ約束の時間前だぞ」と僕が言うと佐倉は「あれ？約束の時間なんて決めてたっけ？」と佐倉が言った。佐倉は僕に言った約束の時間そのものを忘れていた。

「こんな早くから来て何をしていたんだ？」と僕は佐倉に聞いた。

「イメージを浮かべていたんだよ。もう三時間もいるんだけどねえ、パツとしないんだよなあ」佐倉は壁を見つめて悩んでいた。その日の佐倉の服装はそれまでで一番すざましかった。Ｔシャツはヨレヨレでまだらに何色もの色が付着していた。ジーパンも同様にペンキをぶちまけた様な柄が着いていた。作業着だってもっとマシだった。佐倉は僕が到着してから三十分以上ブツブツ言っていた。壁に触ったり、離れて眺めてみたり、叩いてみたり、何をしているのかサツパリわからなかった。傍で見えていたらアブない人だった。そんな佐倉を眺めていた僕もかなり怪しい人に違いなかった。

「おい、蒲田あ、脚立持ってきてえ」と佐倉が突然言った。僕は即座に要求に応えた。すると佐倉は脚立を立てて登り始めた。

「おお！おおおっ！」佐倉は意味不明な叫びをあげた。

「ど、どうした？」僕は佐倉の異変に驚いて甲高い声をあげた。

「でたぞお！イメージが湧いたぞ」佐倉が奇声をあげて脚立の上で大喜びした。佐倉は脚立を下りると大きな布袋からスプレー缶を取り出し「蒲田、離れて」と言った。僕は佐倉に言われて三メートルほど離れた。

「さて始めるぞお」佐倉はスプレーを壁に向けて噴射した。

6 恋慕

佐倉はスプレー缶を勢いよく振ってカラカラと音を立てた。佐倉は聞いたこともない歌を大きな声で歌いながら次から次とスプレーで壁に何かを描いていた。国道を走る車の中には徐行する者まで現れた。駅から歩いてきた歩行者は遠巻きに佐倉の壁画パフォーマンスを眺めていた。歩行者の足が止まり人だかりになった。佐倉はそんなことには気もとめず壁画を描き続けた。しばらくすると佐倉は『手のひらを太陽に』を歌い始めた。脇に佇む自分が恥ずかしくなってきた。佐倉が壁に描いている絵が完成に近づくとその絵がアメコミのようなタッチの絵だとわかってきた。猫顔の佐倉が高層ビルを駆け登っている姿がコミカルで笑えた。絵の中では空には丸みを帯びた飛行機が飛び、太陽が呆れた顔をしていた。

「あれ？もう始まったの」佐倉の友人たちが人だかりを分けて佐倉の脇までやって来た。

「おっ！いいところに来たねえ。もうすぐ終わるぞ！」佐倉は言い終わるとまた同じ歌を歌い始めた。佐倉が最後に描き添えたのは佐倉を下から仰ぎ見る力エルだった。驚いた表情の力エルが観衆の笑いを誘った。佐倉は脚立に登ったり下りたりを繰り返して彼女の傑作は遂に完成した。観衆たちは拍手で佐倉の絵の完成を祝った。

「上手な落書きだね！」と子供が大きな声で言った。佐倉はその子供に向かつて「おお、ありがとう、ありがとう」と言っただ喜びした。

「ねえ、佐倉あ、こんなところに勝手に描いちゃって平気なの？」と佐倉の友人が聞いた。すると佐倉は「勝手にじゃないよ。市役所で許可をもらってきたんだぞ」と答えた。横浜市は実に寛容なのだ。佐倉はまた歌いながら片づけを始めた。僕は脚立を片付けようとして手がペンキだらけになった。

「ありゃ、蒲田汚れちゃったねえ。ごめん、ごめん」と佐倉が言っ

た。

「気にしないでいいよ」と僕が答えると「そうなの？」と佐倉が言った。佐倉はベンジンの瓶とハンドクリームを布袋から取り出して「これを使いなよ」と言っただけてくれた。僕の佐倉に対する好意はこの時一気に上昇した。

7 展示会

壁画の傑作を見届けてからしばらく佐倉と会う機会を失ったまま会社での僕は展示会の準備で慌ただしくなった。営業部では部長の不祥事で慌ただしさに加えて指示系統の不備と急な取引先の引き継ぎでパニックに陥っていたのだ。結局部長は退職。解雇されたのだ。それに伴って僕の上司は出張三昧となった。いくら佐倉に関心を寄せていてもそのことに集中することは難しかった。恋愛感情がこれほどあつけなく自分の中で萎んでいくとは思わなかった。そんなものなのかもしれない。佐倉は人気者。会いたくても会える相手ではなかった。しかし、僕は展示会で脳天に落雷を食らったような衝撃に打たれた。佐倉の上司の登場だった。

展示会の初日は盛況だった。新しく取引を始めたバイヤーなどの来社でいつもより賑やかだった。そんな新規取引先の中に佐倉がいた。

「おつ、蒲田、元気だった？」佐倉は相変わらずだった。佐倉が勤めている店が取引先になっていたとは知らなかったので驚いた。しかし本当の驚きは佐倉と一緒にいた女性だった。

「はじめまして。鈴木です」佐倉と一緒に現れた美女は営業部員の男たちを魅了した。僕も魅了された。姓は平凡だが見栄えは非凡。非凡どころか超一級品だった。

「蒲田あ、もしかしてうちのマネージャーに惚れたね」佐倉が僕の元にわざわざやって来た。

「すごい美人だな」と僕が言うと佐倉が「婚約者がいるけどね」と言った。

「婚約者！」僕は猛烈に残念がった。

「でも破棄したかも」と佐倉が言った。

「そうなのか」僕が聞くと佐倉は笑って頷いた。

「でも好きな人がいるみたいだぞ」佐倉は嫌なことを言った。

「なに！どこのどんな奴だよ」と僕が聞くと佐倉は「マネージャーが惚れちゃった相手に今日会ったよね」と答えた。佐倉は僕の顔を見て面白そうに笑った。まさかその相手が自分の上司だとはその時には気付かなかった。

「なんでお前が会ったんだよ」

「女から直接好きとは言いつらからう。だから私が間を取り持つのだよ。私は愛のキューピットだぞ」と言って喜んでいた。まったくおかしな女だ。しかし一度冷めた僕の恋愛感情は佐倉を求めて息を吹き返した。

8 デイスタンス

佐倉の勤め先が取引先だというのに僕は担当にもなれずにいた。上司にお願いで担当にしてみらいたかったが、それを佐倉にとめられた。それは佐倉が我が社のセール品を購入するために訪れた日のことだった。担当者のチーフが出張で不在だったので僕が対応することになったのだ。佐倉は必要な商品を猛スピードで選び「これを店に送って」と言ってお客様に「ショールームのソファに腰かけた。」

「こらこら、蒲田君、お客様にお茶をお出しなさい」と佐倉に言われて僕は麦茶を用意した。自らお茶を催促するなど佐倉以外にはいなかった。しかし、お茶の用意もしない営業は僕しかいなかった。「君も座りたまえ」と佐倉は言ってお店の売れ筋などをあれこれ教えてくれた。僕は佐倉に佐倉が勤める店の担当を希望していることを告げた。すると佐倉は「君ではいかんよ」と言った。

「なんでだよ」と僕は強い口調で言った。「だって蒲田じゃうちの店にアドバイスなんかできないよ。うちの店はハイセンスなんだぞ。それに気が利かないからね。他の営業なんか週に三回もくるんだぞ。君の上司だって週に一回は訪ねてくるけど君じゃ電話だって週に一回あるかどうか怪しいよ。マメさがないんだよね。それからさあ」

「まだあるのか？」

「あるある。アパレルの営業がそんな当たり前の恰好をしてちゃダメだよ。ジャツケットにしてもパンツにしてもまるで公務員だぞ」「そうか？」

「そんなことを言ってるようじゃ営業成績あがらないぞ。もっとお洒落に気を使ってくれなきゃ店の従業員に嫌われちゃうよ。お洒落で給料もらっている業界なんだぞ」佐倉はうるさい母親よりシャープに僕の弱点を責め立てた。その日の佐倉は確かに洒落ていた。男物のストライプのシャツにAラインのスカート。サマーダークで統

「したコーディネートはさり気なく夏を演出していた。」

「それからさあ」佐倉は何かを言いかけた。

「なんだよ」

「うちのマネージャーは君のところのチーフに惚れちゃっているんだよね」

「そうなのか！それで婚約破棄したのか」

「そうじゃないよ、婚約破棄したのは婚約者が暴力ばかり振るうからなんだよ。そんな時にチーフが店に来て親切だったからクラツときちゃったんだなあ」

「それでチーフに惚れたのか？」

「そうなんだよ。だからチーフがうちの担当をしてくれているとうちのスタツフも助かるんだよ」

「なんで？」

「それはマネージャーのご機嫌がよいからだよ」

「なんだそりゃ」

「それが大事なんだよ」

「そうなのか」

「蒲田に言ってもわからないかなあ」

「よくわからん」僕は正直に言った。

「まあいいさ。蒲田はお洒落に気を使って今の取引先を精いっぱい面倒見なよ」佐倉は言いたいことを言うと言つと麦茶を飲み干して出ていった。佐倉と次に会ったのは彼女が遠い場所へ旅立つ決意をした後のことだった。

9 最終話 海に溶ける想い

駆け足で夏が過ぎ去り、秋が空の色まで変えても東京の風景は人々の装いを除けば大した変化がなかった。営業部ではチーフの部長昇進が決まり人事の穴も埋まった。僕の心に開いた風穴は秋風を通したまま虚しい音を響かせていた。佐倉の結婚を聞いたのはそんな秋の日のことだった。恋愛の虚しいコトこの上なく一人で歩く明治通りは重々しかった。気付けば佐倉に想いを寄せていた僕は勝手に膨らませた恋に押しつぶされていた。

落ち込むのはその日だけにしようと思って僕は一人で人通りの少ない路地に入り静かなバーを見つけて入った。以前佐倉や友人たちと来た店だった。

「蒲田！」僕に声をかけたのは部長に昇進した上司だった。カウンターには部長の隣に憧れの美人マネージャーがいた。会社での昇進祝いを断っておいてこんな場所で新しい恋人と飲んでいる上司が羨ましかった。

「こつちで一緒に飲みましょうよ」美人マネージャーが僕を誘った。落ち込んでいますと表情いっぱいに表していた僕への同情だったのだろうか。

「佐倉のことか？」唐突に部長が言った。

「まさか」僕は精いっぱい虚勢を張った。

「あんなコを好きになっちゃうなんて気の毒よね」美人マネージャーが言った。

「いえ、ですから……」

「別に隠すことはないさ。みんな知っていたよ。相手がどうであれやり切れないよな」部長は美人の恋人との間に僕を招いて座らせた。「今日は私がおごるよ。好きなものを飲めばいい」部長に言われて僕は「強い酒をください」とバーテンダーに言った。

「スピリタスをそのまま出してあげて」美人マネージャーがバーテ

ンダーに得意の笑顔を添えて注文した。バーテンダーは一瞬驚いた表情をしたがオーダーに応じた。僕の目の前に出されたシヨットグラスに注がれた透明の液体がスピリタスという酒だった。僕はその酒を一気に喉に流し込んだ。

「ゲホツ！」僕は強烈なアルコールに咽た。

「ひどいことするな」部長は美人マネージャーに言った。

「佐倉の熱を冷ますにはこれぐらいじゃないとダメよ」美人マネージャーが言った。

「どうして誘ってくれたんですか？」僕は二人に聞いた。

「お前が一気にその酒を飲んだ理由と同じだよ。想いが強いと反動が大きいからな」と部長が言った。

「そうそう。佐倉は存在しているようでそうでないようなコなんだから。片思いの男を量産してどこかに行っちゃうのよね」と美人マネージャーが言った。

「明日ならまだあのコ横浜にいるわよ。きっと昼から山下公園で絵でも描いているんじゃないかしらネ」美人マネージャーがグラスの水を僕の前に置いてくれた。

「さよならくらいはしてきなさい。ケジメをつけてもつとイイ女を探さないとネ」美人マネージャーが優しく笑った。

「明日は有給休暇を使え。あとは一人で飲んでくれ。お前が泣くのを見たくないからな」部長はそう言うと一万円札を置いて美人マネージャーと店を後にした。僕は部長の予想通りになってしまった。その日に流した涙が僕の人生では一番多かったと思う。

翌日僕はワインレッドのスーツを着て横浜に出かけた。クリスマスパーティー用に買ったスーツだった。高級なギャバジンの一張羅。クリスマスに佐倉を驚かせようとして購入したスーツだった。その日、僕は桜木町駅から海岸通りに沿って歩き山下公園を目指した。

山下公園に着くと佐倉は一人で絵を描いていた。美人マネージャーが言ったとおりだった。佐倉は海からの風に髪を揺らして遠い海を眺めていた。僕が声をかけると佐倉は目をパチパチさせて「おっ

！」と言った。

「佐倉、結婚おめでとう」僕が言うと佐倉は「サンキュー！」と言った。

「また外国に行くのか？」

「うん。南太平洋。きつときれいだよ」

「そうか」

「今日はカツコいいぞ、蒲田！」佐倉が僕の顔を見て言った。

「佐倉、俺がお前に惚れていたことを知っていたか？」僕が聞くと佐倉は海に目を向けた。

「海はいいねえ。色も音も。でも見えるのは海面だけだよ。その下は見えないけどたくさん魚が泳いでいるんだよね。きつと私も同じだね。見えないものを無理に見ようとしてもやっぱり見えないからなあ。見たければ海に潜るしかないよ」佐倉はスケッチブックに描いたその日の絵を僕に見せた。それは遙か遠い南太平洋に連なる海だった。

「これあげるよ。蒲田、今度逢う時はもっとイイ男になってそうだね」

「そうりゃそうさ」僕はこみ上げる想いを封じて笑ってみせた。

「ありがとう」佐倉の最後の言葉はとても簡潔だった。同じ言葉を僕も胸の中で呟いた。僕はついにさようならを言えなかった。佐倉が去った山下公園で僕は海を見ていた。それは佐倉が愛した海だった。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8920s/>

恋は突然去ってゆく

2011年5月1日14時10分発行